

杉田玄白 『解体新書』で医療革命に寄与した、実業家肌の臨床医

文 高橋 誠

Text by Mac Takahashi

学校法人慈恵大学広報推進室長
医療・健康コミュニケーター

江戸中期、医学新時代幕開けの象徴、人体解剖の翻訳書『解体新書（かいたいしんしょ）全5巻』は、ドイツ人医師ヨハン・アダム・クルムスの解剖学書のオランダ語訳「ターヘル・アナトミア」を、蘭学医・杉田玄白（1733～1817）らが翻訳した書物です。



『解体新書』
出典:IPA「教育用画像素材集サイト」
<https://www2.edu.ipa.go.jp/>

罪人の解剖を見学した玄白らは、「ターヘル・アナトミア」の正確さに驚き、「これを翻訳すれば日本の医療が大きく発展する」と、4年がかりで翻訳、出版に至りました。概念ありきの「漢方医学」が主流であった当時の日本医学。実証を中心とした「解体新書」は日本人に大きな衝撃を与えました。

「解体新書」のタイトルの「新」が表す通り、古来の医学常識が揺さぶられ、近代化のきっかけとなった革命的出来事でした。

翻訳で造語された「神経」、「動脈」、「軟骨」などは、現在でも使われており、功績の偉大さがわかります。医学の発展だけではなく、本格的西洋語翻訳の先駆ともなりました。

「為すべきは人にあり、成るべきは天にあり」

玄白は没する直前、高弟・大槻玄沢への手記「蘭学事始（らんがくじし）はじめ」で、医家人生を振り返り、「為すべきは人にあり、成るべきは天にあり」と説きました。

「人事を尽くして天命を待つ」「天は自ら助くる者を助く」「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり（上杉鷹山）」と同様、「努力は人がすべきこと、報われるかどうかは天の裁量」という意味です。

オランダ語の習得もあっさり放棄したほど勉強嫌いであった幼少期の玄白。

翻訳を決意した当時を「櫓も舵もない船で大海原に出たような気分」と後に語っています。

玄白が「解体新書」の出版を急いだのは、名誉や出世欲ではなく、医学に関する正しい知識を少しでも早く、一人でも多くの人に知って欲しいという純粋な思いがあったからです。

幕府とのルートも緊密に保ち、蘭学医の立場を保全するなどの目先の利き方は、実業家肌の臨床医であったともいえます。人生50年時代に84歳の長寿を全うしました。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶應義塾大学経済学部卒。ミズノ広報宣伝部、リクルート宣伝企画部、米国印刷会社NewDesignConcepter（LA在住12年）、食品会社エグゼクティブPRアドバイザー、ゴルフ場経営など日米複数企業の広報・マーケティング職を経て、2004年より現職。「病院広報研究会」、「湾岸下町ライブデザイン戦略会議」、「経営戦略ユニット・海医会」主宰。ダイヤモンド・オンラインで連載コラム「森田療法式・心の健康法」を執筆中。趣味はゴルフ、ワイン（日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58）。